

国立中央図書館の変化と革新 - 開館60周年、新しい跳躍の始まり

国立中央図書館 学位論文館長
シン・イニョン（慎 仁鏞）

1. はじめに

去る1999年度の韓国と日本の国立図書館業務交流を機に初めて訪問して以来、これまで3回にわたり日本を訪問することになり、なじみもあります。こうして国立国会図書館の皆さんと再びお会いできることは、古くからの友人達と会ったようで、とても嬉しいです。

2005年度、国立中央図書館が開館して60周年となる年を迎えました。今年10月には、国立中央図書館の未来志向的なビジョンを提示することで責任と義務を全うし、国民から惜しまない支援と信頼を受ける国立中央図書館として再生するよう努力しています。

昨年、国立中央図書館は、躍動的な環境変化に適応して成し遂げた変化と業務革新、国民の情報要求に応じることができる機能の調整、顧客中心の高品質な情報サービス提供のための主題専門司書制導入、500万冊蔵書達成、子ども青少年図書館設立とデジタル図書館構築など、多くの成果を収めました。

今年度は、昨年度の成果を一層強固に固めて行きながら、国立中央図書館の歴史を新しく定めていこうとしています。政策目標を、国家知識情報の中心機関としての役割強化のための世界化推進と、国民向けの知識情報サービス高度化のため開かれた図書館を実現することと定めて、これを積極的に推進しています。

従いまして、今回の韓国と日本の国立図書館業務交流では、国立中央図書館の変化する姿と革新についてお話をしようと思います。

2. 国立中央図書館の変化と革新

21世紀文化の世紀、知識情報社会を迎えて、国立中央図書館が急変する情報環境の変化に積極的に対処していくために、いかなる役割といかなる戦略で対処しなければならないか、国立中央図書館に期待されている役割と機能が何なのかについて、今まで議論された意見と研究資料を中心に分析検討した結果を土台とし、国家を代表する図書館として新たに生まれるための変化と革新を推進しています。

資料収集と整理業務外注を通じた業務プロセス革新

毎年約 10 万冊ずつ増加している国内発行資料を、包括的で総体的な収集整理体制に転換するため、今まで職員が行っていた納本を含む資料収集業務と整理業務を 2004 年 7 月から外部団体に委託、推進することで資料収集を拡大化しました。図書館職員が、単純で反復的な機能的業務から離れ、専門性を強化することができる環境を造成しつつあります。

その例として、資料収集・整理など分散した関連業務を、もとのサイクルに統合・整理して最大所要日数を 50 日から 5 日に短縮しました。また、整理量も 30%程度増加したように見受けられます。

また、1965 年の納本制度施行以前に発行された資料収集のため、“日差しいっぱい屋根裏部屋”^{*}を開設、運営することで、未所蔵資料発掘収集も全国的に推進しています。

^{*}(訳注) 国立中央図書館が蔵書 500 万冊突破を記念して行っている、全国に埋もれている貴重な図書の寄贈運動。納本制度が施行される以前の収集できなかった図書の寄贈を受けて資料を補うことが目的

機能革新と組織改変

国立中央図書館の機能は文化観光部から図書館と読書振興政策業務の移管を受け、2004 年 11 月を境に、とても大きな変化を生じました。変化した新しい組織と機構に適應するための努力を、図書館と職員すべての積極的な協調と参与を土台にして、定着させていっています。

新しい組織は、段階別、総合的な業務処理システムの流れの管理を中心とする組織形態から脱却し、情報管理と活用、そして専門性を土台とする積極的な顧客を中心とする機構に改編しました。

図書館職制は館長を中心に、企画研修部に総務課、図書館政策課、司書能力開発課、情報化担当官を置き、資料管理部は、資料企画課、主題情報課、政策資料課として改編しました。分館形態として運営してきた学位論文館の機能を転換して、国立子ども青少年図書館(仮称)設立業務を推進しています。逐次刊行物、資料保存室、古典運営室は事務官を中心に、各資料室は主題専門司書中心のチーム制に転換し、責任性を強化して運営しています。

専門化と職務能力向上

21 世紀の文化情報時代に入り、情報通信とコンピューターの発達によって図書館人の役割は、教育専門家、コンサルタント、リサーチャー、情報仲介者、主題専門家、文化企画者、コンテンツ管理者として、新たに確立されなければならないと考えられます。

こうした趨勢にあわせ、図書館人は資料選定や整理、レファレンスサービス、利用者の対応のみならず、図書館経営にも参加しなければならないので、これらに関するアンケート調査と

ともに希望する主題を調査し、主題文献の研究分野を人文科学、社会科学、自然科学に区分しました。学問分野の領域と特徴、傾向等を把握するための主題専門司書の基礎課程と応用課程教育を実施した後、最大限希望する主題分野に基づいて全面的に配置し、蔵書収集及び管理システム構築に従った主題専門司書の業務指針も設けて、活用しています。

このほか、企画業務等については、職務の専門性を考慮して専門化領域を拡大し、業務専門担当チーム活動への参加と提案、研究報告の実績などを総合的に評価し、専門家として養成しています。

図書館革新推進団の構成と運営

図書館職員全員が新たな変化に対する適応性と職務効率性を高めるために革新推進団を構成し、全職員が参加するワークショップと討論会を随時開催しています。また、各課別に目標管理を導入、計量化できる成果指標を設けて評価し、職務分析を通じて業務遂行能力を向上させています。

その例として、職員のワークショップを開催した結果、36件が発表され、このうち28件は施行し、残り7件は長期課題として選定、検討しています。

また、国立中央図書館のビジョンの確立と未来の創造のための革新ワークショップを開催すると同時に、国立中央図書館の業務革新方法の公募に21件を受け付け、妥当性についての検討会議と評価委員会会議を経て「一等賞」と「二等賞」を授与するなど、個別にインセンティブを付与することで、職員の参与度を高めています。

500万冊蔵書達成及び活動広報

世界各国の国立図書館の所蔵量に比べて若干少ないですが、国立中央図書館の力量と能力を向上させて行こうという意思表示のために、国内で最初の500万冊蔵書達成行事(2004.9.15)を開催した際、大統領夫人の権良淑女史が参席されたことで、皆が図書館の発展について多大なる関心を持っていることを広く表明する機会を設けたといえるでしょう。

3. 政策目標達成のための履行課題

国家文献資料の収集及び保存の強化

価値あるオンラインデジタル資料の体系的な収集のため、昨年に引き続き、政治、経済学会など90か所あまりのサイトから1日平均100件程度の分野のウェブ文書を発掘、収集すると同時に、収集したデジタル資源の著作権を解決する方法を関連機関と協議し、推進しています。

海外所在の韓国関連資料は米国の国立公文書館(NARA)所蔵の韓国関連文書約180,000枚

を撮影し、ケネディ大統領図書館及び東北アジア地域の韓国関連資料も継続的に調査し、撮影、収集する計画です。

国家文献の保存処理体制の構築及び長期総合対策の準備とともに、国際的な協力体制の構築のため国際図書館連盟資料保存コア・プログラム(IFLA-PAC)の国内センター指定を検討すると同時に、国立図書館を相互訪問する研修等を通じて韓・中・日の資料保存の協力体制もさらに強化されるでしょう。

デジタルコンテンツの拡充と殊外階層に対する情報アクセス機会の提供

国家資料総合目録を国家データベース化できるように、公共図書館、行政府資料室の目録データ 79 万件を国家資料共同目録システム(KOLIS-NET)にアップロードすると同時に、図書館所蔵資料の中で学問的な情報価値が高い 18,111 冊の原文情報も、国家電子図書館を通じて対国民情報利用サービスに提供し、学術誌の記事情報など合計 12 万 5 千件のデータベースも構築する予定です。

国立障害者図書館は図書館及び読書振興法改正案に盛り込まれるよう、積極的に推進しています。視覚障害者のための原文情報データベースは大学の教科課程の基本学習書(793 冊/26 万 9 千ページ)を音声と点字の形で構築し、公共図書館、学校図書館、大学図書館を通じて提供することで、特例入学生たちが有用な情報として便利に利用することができる環境を作り出していく予定です。

対国民知識情報サービス及び複合文化情報空間の提供

対国民情報利用サービスを拡大する方法として、多様な情報サービス類型の開発など、積極的なマーケティング戦略を導入し、利用者分析を通じて階層別に差別化したカスタム情報サービスを提供し、図書館所蔵資料利用のための広報教育などを強化しています。

新着資料の目次・目録情報を、排架と同時に利用者が要求した主題の情報として e-mail で自動的にサービスされるようにする予定であり、古典資料の中で学術的価値が高い資料についての解題集を刊行し、誰でも簡単にアクセスできるようにすると同時に、これを公開し、インターネットサービスも提供する予定です。

図書館の文化活動に一般の人々の参加を促し、興味を引き起こすために、「作家とともに開く本の世界講座」と「文化探訪」を毎月実施し、今月の本、光復 60 年、図書館開館 60 年、外国大使館の展示も誘致し、推進しています。

図書館活動への参加機会の提供及び専門教育

図書館と全職員は、新たな変化に適応し、職務に対する効率性を高めるために、今年 3 月から毎月、「開かれた政策セミナー」*を開催しています。

「開かれた政策セミナー」では、各課別の懸案事項や重要な課題を中心に、対象とするテーマを選定し、これを開放的な討論形式で進行することにより、解決方法を模索するとともに、政策方向も提示しています。これによって、図書館員の協力と理解を土台とした図書館政策業務を推進しています。

*（訳注）国立中央図書館は2005年から国立中央図書館の中心政策に関する研究・討論を通して図書館業務を革新し図書館の発展のための各界の意見を集めようと毎月テーマを決めて図書館職員をはじめとする各種図書館人、学界の教授などの専門家を対象として「開かれた政策セミナー」を開催している。

さる3月24日には「出版と図書館、そしてサービス」をテーマとしたセミナーが、4月8日には「主題専門司書の専門性強化のためのシステム支援方法 - デジタルレファレンスサービスを中心に - 」をテーマとしたセミナーが開催された。セミナーは国立中央図書館司書研修館2階大講堂または大講義室で開催される。（「国立中央図書館開かれた政策セミナー年中開催」『出版ジャーナル』（2005.5）（Z21-AK15）

この他、司書職を対象とする30の専門教育課程や、ボランティア課程などの5つの課程を運営しています。集合教育への参加が困難な職員のためのサイバー教育課程の開発・運営と、主題専門司書のためのより高度な教育課程、主題専門課程、そして図書館従事者のための教育課程を開発し、これまでの事例研究や現場実習のための研修プログラムも開発・運営しています。

国際大会を成功裡に開催し、交流を拡大

2006年8月20日～24日にソウルで開催されるIFLAの年次総会はCOEX（訳注：ソウルにあるアジア最大の展示場。2000年5月オープン）で開かれます。2006年8月24日には国立図書館長会議（CDNL）が国立中央図書館国際会議室において開催されますので、失敗なく進行できるよう、準備に万全を期すことにより、他の大会よりも成功裡に開催されると確信しています。したがって、日本でもソウル大会に関心を持ち、多くの人々が参加されるよう、広く広報して下さることを、同時にお願い申し上げます。

各国の国立図書館と交流協力があり、韓国と日本、中国に引き続きシンガポール、ロシアへと拡大・推進しています。さらにはアメリカの大学図書館とも協力体制を維持し、国立中央図書館の基盤を広げていきます。

図書館インフラの構築及び国民読書運動の展開

文化観光部から図書館及び読書振興政策業務を移管された後の初年度事業として、公共図書館の建設について、2011年までに750館（人口6万人あたり1館）を目標とし、63館の建設を推進しています。また、2006年5月には、国立子ども青少年図書館が開館し、1998年から推進してきた国立デジタル図書館建設も2008年度開館を目標として、今年12月に着工する見込みです。

国民読書振興運動は政府全体で活性化していくために、読書関連機関・団体との協議と意見

集約過程を経たのち、総合的で体系的な読書振興計画を策定し、9月の読書の月を契機として、公共図書館、大学図書館、学校図書館などとともに全国的な読書の生活化運動として、広げていくこととなるでしょう。

これと共に、図書館発展と読書活動の進展のために献身していらっしゃる隠れた功労者を発掘し、大統領表彰などを授与することにより、小さい活動の波が大きな波として引き続き広がっていくよう、積極的に推進しています。

国立中央図書館 60周年事業

国立中央図書館開館 60周年を迎え、今年 10 月には、国家を代表する図書館として新たな跳躍のための地位強化と向上するための方法、国家の図書館政策研究センターとしての役割を確立、対国民知識情報サービスの提供、国内外の図書館との協力強化と戦略を盛り込んだ未来志向的な中長期(2006-2011)ビジョンを策定し、国民に向けた報告会を開催することによって、国家を代表する文化情報機関へと進化していきます。

同時に 10 月頃には中国、日本、モンゴル、ロシアなどが参加する東北アジア資料共有基盤構築のための国際学術セミナーも開催する予定です。

4. おわりに

これまで、国立中央図書館の変化する姿と革新について、申し上げてきました。

そして、今、国立中央図書館では、その変化と革新について組織安定と機能拡大及び運営活性化のため全職員が真心をささげ、国家を代表する図書館として図書館発展を先導していく役目を、より一層充実して遂行することができるような基盤の造成のために、心を一つにして団結して努力しています。

そして来年 5 月の国立子ども青少年図書館設立をはじめ、8 月には IFLA 年次総会と国立図書館長会議が韓国で開催されます。

このために国立中央図書館では、日本をはじめとしたアジアのすべての国家がその地位を高めていけるような世界的な大会になるように、最善の努力をつくして進行しています。

来年度、ソウルで開催される世界図書館大会においても、国立国会図書館の皆さんとまたお会いできるよう、願っています。

そして、今後とも韓国と日本の国立図書館業務交流が契機となり、協力と和合を土台とした国立図書館発展のための礎となることを期待しております。

ありがとうございました。